

劇 あそび

「雨」

子 子 子
京 淑 子
黒 木 治
石 佐 関

六月の雨季を保育にとりいれるのに劇あそびをつかってみた。三才、四才、五才の子どもに同じ題材で、劇あそびがどのように展開していったか、保育の経過を次に各組の先生に述べてもらおう。その何れも、既成の脚本を使ったのではなく、子ども遊びの中から劇を見出して組み立てていったものである。

石黒(三才児 川の組)

六月の季節にふさわしいものとして、雨を各年令共通の劇あそびの題材として選びましたが、今年は例年よりも少しつゆがおくれたようで、実際は六月に入ってから、あまり降らない結果になってしまいました。

それでも「雨」という主題のもとに劇あそびをするということになってから、四月、五月の間に五、六回雨の日がありましたので、雨の日の三才児のあそびを記録してみました。その結果、この組の子ども達は、特に雨ふりには外へも出られず、また自分達で何か室内のあそびを發展させる程の年令でもないために、手近に揃っているままごとの道具で、殆んど幼児がままごとあそびをしていることがわかりました。時には組中全員がままごとに参加して、いつもは保育室の中にたみ二畳分の広さのままごとの場所をつくってありますが、それでは狭いといって、机や椅子を全部片づけてしまつて、あるだけのごさを皆ひろげて、丁度保育園全体を一つのままごとあそびの場としてあそんでいることも

よく見られました。一時間余りも、お客様になつたり、ごちそうを並べてたべたり、お人形をつれておつかいにでかけたりいろいろとしておりました。

劇あそびの中にままごとをとり入れたいと思つたのは、いつもの子どもの遊びの状態がこのように、ままごとあそびが主体となつていることを見出したことによります。幼児の数は川の組は男子八名、女子七名です。

ままごとと雨をおりませで、一つの劇という形にしたいと考へたのは、今から二週間位以前のことになります。始めはすじも配役も何もなしに、皆で「ままごと」のうたをうたったり、曲に合せてごちそうをこしらへたりして遊びました。一方雨の方は、雨はどちらかといえば動物などに比べると静的な抽象的なものですから、子どもに少しでも親しみを増してもらへるようになつて、始めに雨のうたで知っているうたを尋ねてみました。その結果、皆の知っているうたは「雨が雨が降って来た」と「雨雨ふれふれ」の二つでしたので、それに合せて雨の自由表現をしてみました。

劇あそびでの第一段階では、全員で雨にな

ったり、おうちごっここの家の人になったりして遊ぶことをくりかえし、次に劇を構成する段階では、自分達で雨か家の人か、どちらか好きな方の役を選んでもらいました。最初に劇の形式で二組の配役をこしらえてやってみてから、二回三回とやる間に、今日はままごとをしたり、次には雨になったりと違う役をやった子どもが三人ばかりおりました。が、あとの人達は私は雨、僕は家の人と自分で主張するので、無理に役をいろいろとかわることもしせずに、そのまま続けていきました。

ままごとをしている人達が「いただきます」「ごちそうさま」「お使いにいらしてください」「今日わ」などとせりふをいいますが、三才児の劇あそびには、本来ならせりふを伴わないものでよいと思いましたが、これらの言葉は日頃のままごと遊びの中でいわれていた言葉のために、劇の中でも自分達で考えたり、思いついたりして言っているので、入れてあつきました。劇中で話すことに次第に大きな興味を持ち始めたようでしたので、雨の人達にも言える人には言葉をつけてもらいました。しかしまだ個人的にせりふの交換は

できないので、言える人だけでよいと申しましたので、同じ言葉もバラバラにいたり、友だちのいうのを聞いてまたその後から同じせりふをいったりしていましたが、結局自分達で楽しんで劇あそびができれば、三才児のものとしては人に見せるための完成した形態になっていなくてもよいと思つてすすめてまわりました。

次に曲の撰定についての問題ですが、川の組の劇あそびに使った曲は、殆んど幼稚園に来るまでに、家庭で聞きおぼえて知つていふものか全然わからない三才の人達に、新曲で音楽劇を構成すると、劇をスムーズにするまでに曲を覚えなくてはならず、三才児には少しそれは負担になるのではあるまいかと考えたからです。そのために今回はよく知つていふうたばかり選びましたから、ざん新な感覚という点では少し乏しかつたかと思ひますが、やつている幼児の方には、曲の親しみがすでにあつたために、劇に対する興味も比較的に早く出て来たように思ひます。

二週間程前から劇にとりかかりだして、おべんとうのある日は殆んど毎日一回ずつ練習

をし、日によっては、興味の強いときには二回くりかえしてやつたこともありましたが、とにかく劇らしい形にまとまって来たのは、それから約一週間ばかりたつてからのことです。その後も大い毎日、一回ずつやつて今日になりました。

佐々木（四才児 池の組）

今年の春は雨が少く、雨の日の子どものお話をきく機会も思うように得られませんでした。が、雨の日の子どものお話は、新入園児がいる関係上、新しいレインコートをきたり、雨靴をはく喜びに關したことが主となつておりました。それで、三年保育で一年間幼稚園に來ていた子どもたちも、中の組になつたのだから、一人でレインコートを完全に着るようになった、また、新しく入つた子どもたちも、幼稚園に入つたのだから、一人で着られるようにしたいという意図をもつて、雨の日のおかえりの時は、レインコートを着る競争などもしたりしました。それを、劇の第一場にもつてきたわけでございます。

第二場は、雨ふりの日に雨のうたや雨の自

由表現などは、しておりましたが、五月はじめに種まきをしてから、毎日子どもたちが水をやっておりましたが、雨がふった日に、「今日は、雨がふってるから、水やらなくてもいいね」という子どもがありましたので、それを機会に、雨が降ると喜ぶものについて話合ひまして、その結果、雨ふりで喜ぶものとして、かたつむり、花、かえる、をとり上げ、雨の子どもになる人と、かたつむりや花やかえるになる人にわけて、めいめい好きなものになってリズム遊びを致しました。それが第二場となったので、ございます。

四才児では、半数以上が新入園児であり、劇とはどういふものかを知らない子どもが多く、あとでお話があると思いますが、五才児のように、先生と話し合いながら、自分たちで劇の筋を考えていくことは不可能であると思ひますので、第一場は、ごく普通の幼稚園生活の場面、第二場は、普通の場合にも取扱つてゐるリズムであり、それを私が、劇としてまとめるために、第二場に第一場に出てきた幼稚園の子どもを登場させて、かえりみちの出来事として関連づけました。

第三場は、「雨もおうちへかえること」にしま

しょう、雨のおうちはどこかしら」とたずねまして、雨のおうちはお空で、どうやってかえたらいいかしらということでは、虹をわたくして行くという返事がありまして、そのようになつたわけでございます。虹ということが出て来たのには、此の頃、おえかきで虹ばかりかいてゐる子どもがあつて、虹をかくことがはやつてゐることに影響されてゐると思われま

す。このような構成で、台詞は、日常使つてゐる言葉ですが、なかなか大きい声では言えない状態です。おめんは、入園したてです。で、私共で作りました。

このようにしまして劇らしくしてやりはじめたのは五月三十一日から六回やり、今日は七回目でございます。

人の前で話をする経験も、リズムの経験もまだ少い状態で、表現は十分ではありませんが、そういう子どもたちも劇をしてあそぶたのしさを十分にたのしんでくれればいいと思つて、のびのびとさせるようにいたしました。

関（五才児 海の組）

雨という共通の劇のテーマを決めてから、筋も内容も子どもの方から出たものを取り上げたいと思つて、雨の日の自由会話を聞き、雨の日の話合ひをして、どの程度、雨に関心を持つてゐるのか調べてみました。

雨の日の自由会話では「たくさん降つてゐるね。」「きょうは大降りだ。」「だんだん小降りになる。」「などの降り方の種類と「レインコート着てきた。」「かささして来た。」「などの雨の日の支度について、あとはせっかく遊ぼうと思つてゐたのに外で遊べないということでした。

雨の日の話合ひでは、どんなようすで幼稚園に来たかということでしたが、ぬれては困るということが気になっていました。雨についで創作話では、雨に関連づけられたのは一人で、それも動物が出かけたから雨が降つてきたので、やめて帰り、又次の日出かけたという程度のものでした。

雨の日に雨支度を整えて、幼稚園の庭を歩いてみました。前もつて何の為にしているか或は何をしましょうなどということは云わずに、雨にどういふ関心をもつてゐるか、又、関心を持たせる意味で出てみました。この結

果、雨の時には、ぬれないように傘に入った
り、かけ出してはねをあげたりせず、皆が案
外気をつけることがわかると同時に、「ぬれ
る」「ぬれない」ということが大きな関心事
であることがわかりました。

雨をテーマにした絵を皆でかいたところ、
なかなか新しい題材はありませんが、面白か
ったのは、木のかげにランドセルを背負って
雨やどりして、傘がなく困っている絵、洗濯
ものをとり入れている絵、雨や水に関係ある
動物を沢山かいた絵、池に金魚や水草が浮ん
でいて雨水の輪が出来ている絵、お花の絵な
どでした。このように、雨の降り方、自然界
の喜び、雨の為の困惑といったことに関心の
あることを知り、一方リズム遊びで雨自身に
なってその動きをしたりして、それらをまと
めて大体の構想は持ちました。

五月十八日に第一回目の劇あそびをしまし
た。その時、皆で遊んでいるところに、雨が
降ってくる場面をしてみました。何をして遊
んだらよいか、はじめはお日様が出ていたら
よいという風にして話し合いは進み、こちらか
らも次を予想させて子ども達の想像をとり入
れて進めて行きました。遊んでいて劇に題を

つけるとしたら何がよいか聞いてみました
が、「雨のおでかけ」「雨の旅」「雨と子ども」
という題が出ました。

リズム遊びで、雨自身の動きをしたりして
いますので、雨自身になって動けるものと思
い、「雨のおでかけ」ということにして、第二
回、第三回目には、雨が出かける雲の上のこ
とを入れ第一の部分とし、第二の部分に子ど
もの遊んでいる場面を置きました。ほかに、
この場面にどんなものが登場したらよいか考
えて、花や木が出ました。第一と第二の部分
の間のうたは、劇らしい雰囲気を出す為にと
思って、皆で考えたのですが、てんでにいろ
いろ云っていましたが、一人の男児が
「雨は小さいあめつぶちゃん
お空の上から ぼつぼつぼつ
雨のちびちゃん うれしいな」
と一行一行云ったのをかきとめておき、幼児
の歌い易い節をつけてあげました。最後の一
行は余り、雨つぶちゃん、ちびちゃんをつづ
くので、題名を考慮して「今日はおでかけう
れしいな」と少しだけ替えました。そして、
いよいよ雨の子どもが出かける所でうたうこ
とにしました。

第三の場面は、雨の子どもを汽車にのせて
方々見て廻るところは、汽車につかまらせれ
ばよいということは私が提案したのですが、
汽車の中からどんな所をみたらよいかは、皆
にいろいろ聞いてみました。その結果、花・
木・島・池・蛙などが出ましたので、それを
とり入れました。汽車あそびは皆大好きです
ので劇あそびをしているうちに、子どもの提
案で駅の人を登場させ、雨の日の駅のようす
をここに入れることにしました。島のようす
は汽車の動きとのつながりがうまく行きませ
んでしたので、第四の場面と致しました。

雨の降り方の種類を出して行こうと思い、
普通の雨の降り方は、あまり陰気な感じにな
らないようにスキップで出来る曲にし、ポツ
ンポツンと一粒ずつ落ちてくる雨は、曲はス
タックカートで弾き、動きは、子ども達の任意
にしました。両足とび、ゆっくりと大股のか
け足、さらさらとはや足など表現はまちまち
で面白いと思いました。いずれも曲によく合
わせていました。夕立は、強くピアノを弾き
ましたが、一心にかけ廻って居り、子ども達
はここで雷を登場させました。島に静かに降
りそぐ雨、これは普通の降り方の曲を柔く

静かに弾いたのですが、静かなかけ足と手の動きとで表現していました。いずれも、曲を変化させて子ども自身に動きの変化を表現させ、そのままの形で劇に使用致しました。

汽車に乗った雨が、いろいろなものをみて最後にどうするか、皆もすぐには考えつかず私としても、池や川で方々から来た雨水の友だちと一緒にいるなどいろいろしてみました、どうも不自然でした。すると、ある男児が水蒸気になって空にかえるということを出しました、本からの知識であったり、お兄さんの話をききかじりのように思い、この場面を雑然とやっているうちに、いろいろなものをみた雨が、最後の野菜と仲よしになるということで終った方が、むしろ楽しい、夢があるように思えましたので、偶然、フォークダンスの曲を弾きましたら、ある女児が、そのふりつけを皆に教えはじめ、皆はこれに興味が出てしまい、とても楽しそうにしていましたので、そのままとり入れ、苦心していた最後の場面が出来上がったのです。

雨がいろいろな降り方をして、いろいろなところに降るといので、三十八人の子どもが、いろいろな役についたのでは筋も通らず、

まとまりがつかないので、雨つぶの子どもが、はじめて降って、新しい経験をするというように筋を通してみました。

せりふは、五、六回目頃から、次は何と云ったらいかしら、というように誘導して、子どもの中からとり出しましたが、どうしても云わない時には、「先生ならこう云うけど、皆の方が上手に云えるから云ってみてごらんさい。」というようにして、大人の口から出た言葉そのままをせりふとしたのは一言もありません。従って、せりふは身近な日常会話の形式になって居ります。大体、せりふが、決して固定してからは、大きな声で云うことを約束し指導して、たった一人で云えない子どもにも、グループで話してから一言ずつは一人で云うように機会をつくりました。最後には、皆一人で云えるようになりました。

雨というテーマをきめてから雨の降ったのは、幼児が幼稚園に在る間では五回で、その点、劇にとりかかるまで苦心致しました。

最初の話し合いから今日までで練習は十五回で、五回目から、せりふをつくり出し、役をきめて、七回目にいろいろな役が登場する

順がはっきりしてわかってきました。十四目に、今日の形になり、劇的雰囲気になって来て、大きな声で云う子どもが出て来ました。この頃から待っている時の指導に気をつけました。十一回から十四回にかけて、お休みの人が出ましたが、他の人が変わるとすると、自分の役でなくても、動作やせりふをよく知っているのが驚かされると同時に、一つの劇あそびに皆が注意を集中して参加活動していることを知りうれしく思いました。

年長組になって、劇的な雰囲気に興味を持たない子どもは誰も居りませんでした、まだまだ待っている間など、自分の番が終るとかけの方からつられて前の方に出て来てしまったりして、こういう時の指導を相当に致しました。

今回の劇はテーマがこういうものだっただけに一回一回子どもと協同でつくり上げたということが出来ると思います。途中、たたいろいろなものが数多く登場するだけのようないろいろなものが数多く登場するだけのような気がして、力を落したり致しましたが、子ども達の意欲で、楽しく雨あそびをつづけていくことが出来たと思えます。